



筑紫女学園大学リポジット

異年齢児集団の保育活動について--久留米地区における異年齢児保育活動の実態調査より--

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2015-05-25 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 永久, 欣也, NAGAHISA, Kinya メールアドレス: 所属:
URL	https://chikushi-u.repo.nii.ac.jp/records/407

異年齢児集団の保育活動について

— 久留米地区における異年齢児保育活動の実態調査より —

永 久 欣 也

A Study on Pre-school Activities Among Different Age
Groups of Nursery school and Kindergarten children
— A survey conducted in Kurume Region of Fukuoka —

Kinya NAGAHISA

はじめに

少子・高齢化が進んでいく日本社会。とりわけ幼児教育をとりまく環境にはひと際厳しいものがあるが、世界的不況の波が少子化にさらに拍車をかけているとも言えよう。一時、経済が持ち直した時には出生率も若干上向きかけており、少子化に歯止めがかかるかと期待もされたが、ほんの僅かの期間でしかなかったようである。

日本社会における少子化の原因としては様々な要因があるが、一番の問題としては、女性が安心して出産し、子育てのみに追われることなく、キャリアウーマンとしても活躍できる場が十分に与えられていないということに尽きるであろう。仕事はしたいが子どもを預かってくれる場所がない。子どもが二人になってしまうと働きづらい。だから子どもは一人だけにする。そのような思っている既婚女性が多いのも現実である。ましてやシングル・マザーでは言うまでもないであろう。

これは、保育事業に対する行政のまずさでもあると言えるが、少子化社会と言いながらも保育所に入りたくても入れない待機児童が4万人もいると言う。本当に少子化なのかと疑いたくもなってしまうが、公立保育所への入所希望者から割り出した数字であり、現実的には仕方なく設備が不十分や、費用も高い民間の無認可保育園や託児所に預けざるを得ない保護者、幼児が多いのである。

そして、一方、都心部の幼稚園では園児数の減少が進んでおり、廃園に追い込まれていって

る園も増えつつある。その生き残り策として、これまでは3歳以上のお子さんを預かってきていたが、最近では2歳児さんからの入園を認めており、午後からも延長保育などを実施するなど、幼稚園の保育所化が加速しつつある。当然のことながら、入園者の数によって保育活動の内容にも制約をうけるようになってくるわけであるが、少子化とともに増えつつあるのが異年齢集団における保育活動、いわゆる縦割り保育である。モンテッソーリ教育を保育活動の基本とおく園では、園の設立当初から異年齢児集団による保育活動を取り入れているところも多いが、ここ数年、少子化の影響もあってか横割り保育から縦割り保育、異年齢児集団の保育へと移っていく園が多いのも注目すべき点である。

異年齢児保育の実態については、まだまだ未知な部分が多いが、今回、久留米地区の幼稚園、保育所にアンケートへの協力をお願いし、その回答をここに報告するものである。

久留米地区における異年齢児保育について

この春、久留米地区における福岡県私立幼稚園振興協会加盟の幼稚園29園と、久留米市私立保育所連盟に加盟する保育所43園、合わせて72園に対し異年齢児保育に関するアンケート調査の協力を依頼し、44園から回答を得ることができたが、郵送のみによるアンケート調査の結果として61%の回答率を得られたことはまずまずの成果と言えよう。

今回、アンケート調査の対象として久留米市の園を選んだ理由としては、福岡市内への通勤・通学にも至便さがあり、筑後地区の中心地として古くから栄え、近年周辺地域との合併により近代都市部と田園都市部の二面性を持つ自治体であるということと、私自身がこれまでかかわってきたゼミ生の大半が久留米市周辺の地域からの出身者であったことである。また、ゼミ生や久留米方面からの学生たちが幼稚園実習や保育所実習で久留米地区の各園でお世話になった時、その巡回訪問指導で各園を伺わせていただくことが多く、他の自治体に比べ馴染みがあるというのも理由である。

実際、私が5年前に京都からこちらに赴任してきて以来ずっとゼミ活動でお世話になっている園に金丸保育園さんがあるが、学生たちにとって初めての保育所実習を経験する前に毎年見学実習という形で訪れさせていただき、保育所の雰囲気や学ばせてもらっている。この金丸保育園さんも異年齢児保育を実践されている園であり、今回のアンケートにも快く回答をしてくださっている。

また、保育所だけでなく、巡回訪問指導で伺ったのがご縁で、それ以降親しくしていただいている幼稚園の先生がたからも回答の返信をいただいたが、これまでまったく面識のない保育所や幼稚園さんからも多くの回答を得られたことは非常に有難く思っている。そして同時に回答を下さった園の多くから異年齢児保育に関心を持たれているということが感じとれたのである。

アンケートの方は簡単な項目に答えてもらうというものではあったが、質問の内容にはまだまだ不備な点も多く、今後の課題としてつなげていくつもりである。今回の久留米地区を手始めに、さらに県内の様々な自治体における保育の現場での異年齢児保育の活動についての調査を広げていければとも願っている。

少子化とともに異年齢児保育の必要性がますます大きなものとなっていくのは時間の問題であろう。活動形態そのものはそれぞれの園の置かれた立場によって変わりはするが、園の独自性を大切にしながらも、園同士がお互いに情報交換をし、よりよい異年齢児保育の実践ができるようになることも必要である。このアンケート調査は、各園にとっての将来につながるワンステップともなればと思い実施した面があるが、今回の回答結果から見てきたものはやはり異年齢児活動の持つ良さというものであるような気がするのである。

..

..

.. A

..

[.....]

.. B.

..

[.....]

.. C

..

..

..

[.....]

D

[.....]

E

[]

.....

.....

[]

.....

.....

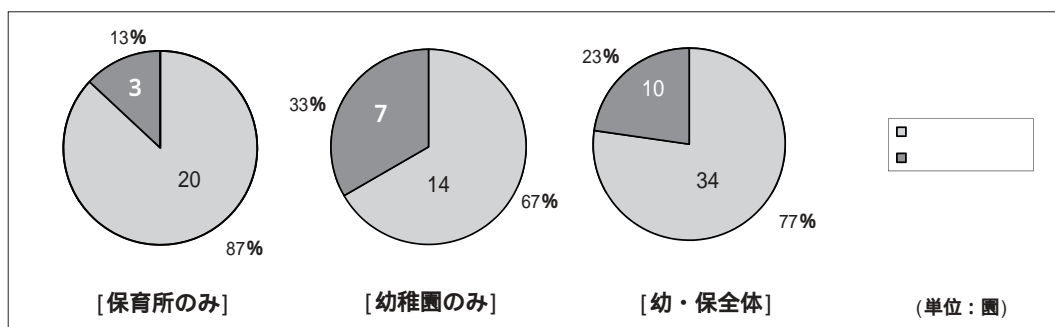
[.....]

.....

.....

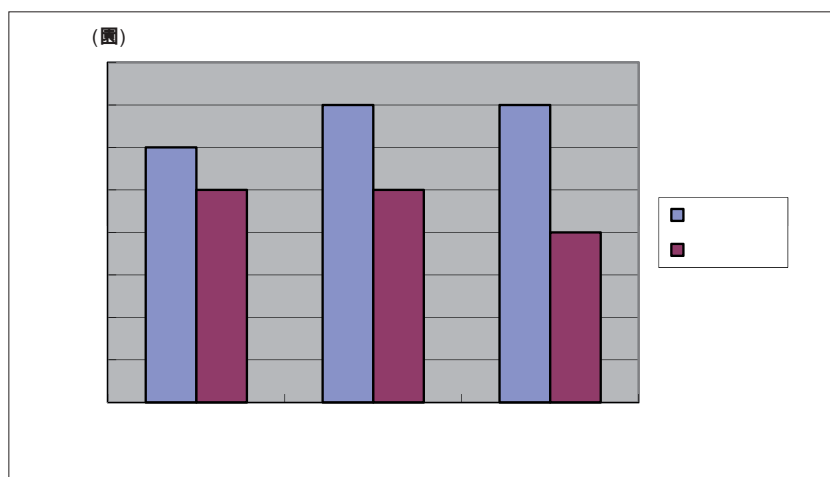
調査項目は以上のようなかなりシンプルなものではあるが、それぞれの回答はつぎの通りである。

Q 1の「貴園では異年齢児保育（縦割り保育）を実施されていますか。」という問いに対し、保育所では回答のあった23園中20園が実施していると答えており、幼稚園では21園中14園が実施していると答えている。全体的にみると実施している園が34園で77%という実施率である。しかし、その一方で実施していないとする幼稚園が7園あり33%の割合を占めている。これまで通りの横割り保育を続けておられる園も幼稚園の方ではまだまだ多いということである。



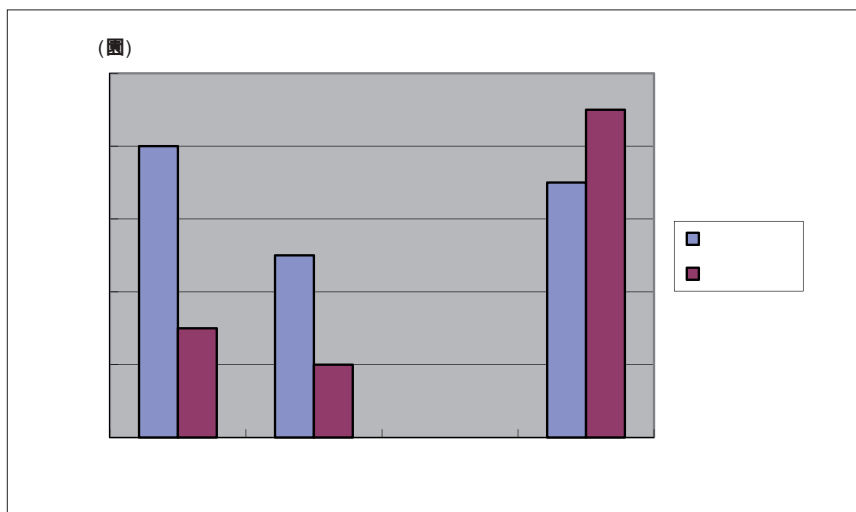
異年齢保育実施状況

Q 2は、Q 1で実施していると答えた園に対し、Aでは「実施の形態」を問い、Bでは「実施の時間帯」を、Cでは「実施年齢の組み合わせ方」を求めたが、Aの「実施の形態」では、毎日実施しているとした園が保育所では6園、幼稚園では5園。生活発表などの行事などでの実施は、保育所では7園、幼稚園では5園。その他では保育所が7園、幼稚園が4園で、いずれも週1回や月1回といった回答が多かったが、高良内幼稚園さんのように3歳児さんが入園してすぐの2週間程度は縦割りを実施しているという回答もあった。



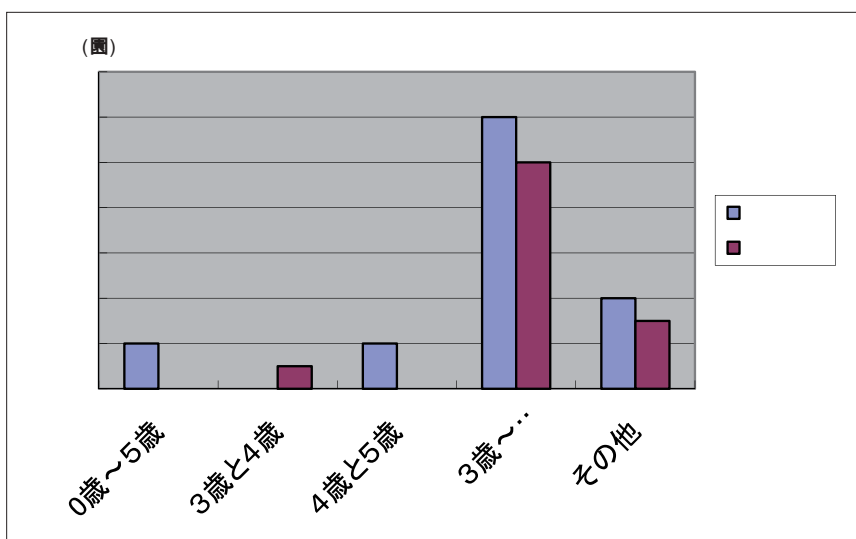
実施の形態

次に実施時間帯であるが、保育所、幼稚園ともに午後の時間のみというのは0園であった。これは、保育園では午後には午睡の時間があり、幼稚園では午後2時頃には降園準備を始めるからであろう。大半は午前中のみといったところであるが、さすがに保育所は子どもを預かっている時間が長いため、終日実施という園が8園あった。



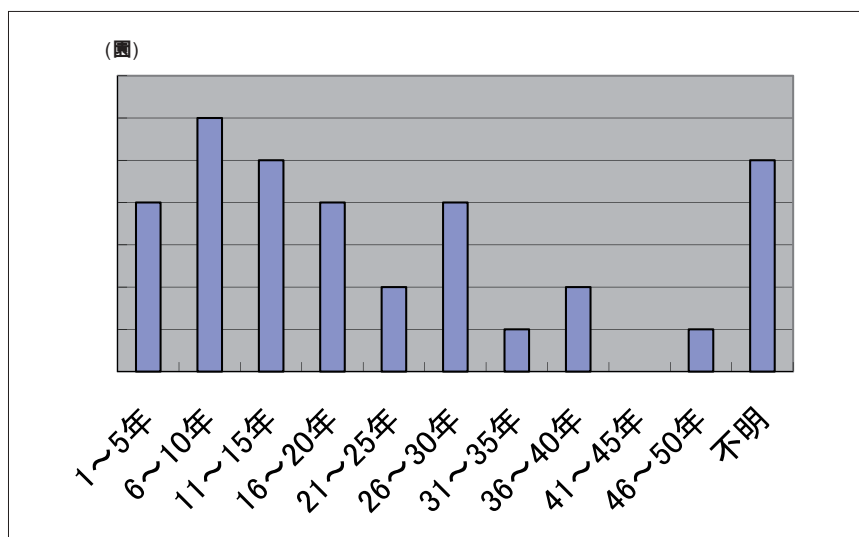
実施の時間帯

そして、実施の仕方として一番問題となるのが年齢の組み合わせ方であるが、幼稚園は基本的には2歳以下の未満児はいないので3歳以上、年少組さんからの組み合わせとなるが、やはり3歳から5歳まで一緒に組み合わせ方が一番多いようである。



異年齢の組み合わせ

Dの質問では、「異年齢保育の活動を始めて何年になるか」を聞かせてもらったが、6年から15年といった園が多いようであった。ランビニー幼稚園さんの40年や、高良内幼稚園さんの50年という長きにわたって実施されてきている園もあることには驚かされた。また、いつ頃から異年齢保育を始めたかわからないという園も5園ばかりあるようである。



異年齢保育実績年数

異年齢児保育を実施している園に対しての最後の質問は、その「利点」と「難しいと思われる点」を答えてもらったが、「利点」「難点」半々といった感を持たれているようである。

「利点」

- ・ 年上の子どもが年下の子どもの世話を意識的に行う。
- ・ 上下の信頼関係ができてくる。
- ・ それぞれの立場で自分が今何をすべきかの判断ができるようになる。
- ・ 一人一人にあった活動ができ、集中して取り組んでいけるようになる。
- ・ 偏った保育にならない。
- ・ 共存共栄。共に生き、共に育つという感覚が育っていく。
- ・ 異年齢児とのかかわりのない子どもたちにとっては触れ合いのよい機会となる。
- ・ 思いやりの心の芽生えに大きな役割を果たしている。
- ・ 遊ぶお友達が多くできる。
- ・ 保育者の指示よりも年長組のお兄さんやお姉さんからの指示の方が事が上手く運ぶこともある。
- ・ 遊びの伝承や生活習慣の伝達にも役立っている。
- ・ ルールある遊びやごっこ遊びに効果がある。

異年齢児保育の利点としては、概ね上記のような回答が重複していたように感じられたが、思いやりの心が育つという回答は、ほぼ全園が記述されていた。

そして、難しい点については以下のような回答が寄せられているが、最初の取り組みが上手くいけばさほど難しく感じることはないとされる園も多いようである。

[難しいと思われる点]

- ・ 3歳児が異年齢保育を受け入れられるようになるまでに時間がかかる。
- ・ 学年毎の入園者数によってはペアを組ませづらい年がある。
- ・ 子どもたちのための活動（あそび）で、何をさせるかを考えるのが大変。
- ・ 保育者同士が共通意識を持つことが大切であるが、そのための時間をとるのが難しい。
- ・ 長時間の活動になると年長児の負担が大きくなるように思われる。
- ・ 何度も同じことをしてあげてしまいがちになり、自発性が阻害されてしまう恐れも有る。
- ・ 年少と年長での発達のちがいがからくる言葉の理解の面。
- ・ 給食時間が長くなりがちである。
- ・ 製作活動の際の年齢基準の合わせ方。
- ・ 仲のよいお友だちと別のグループになるのを嫌がる子がいる。
- ・ 兄弟姉妹とのかかわりのない子は最初、グループ活動を嫌がる。
- ・ 年齢差による体力や運動能力により危険が伴うこともある。
- ・ 生活発表会の時などは、異年齢児グループでは能力的に差があるため同年齢同士がいいように思えること。
- ・ 保育行政とのかかわり。

難しいと思える点は、やはり年齢差や能力差をあげられる園が多いように思われるが、その点さえクリアすれば利点の方が上回っているのではなかろうか。実際、多くの園が異年齢児の保育を実践されてきているが、元々横割り保育だった園が縦割り保育に変えていかれるケースが多く、それらの園が途中からまた元の横割り保育に戻したという話をあまり耳にしないのもその表れであろう。

そして、アンケートの最後にQ. 3として、異年齢児保育を実施されていない園に対し今後の見通しについて聞かせてもらったが、10園中9園までがいまのところは異年齢児保育の実施計画をもっていないとの回答であった。幼稚園はすべて現状維持であり、保育所の残り1園が思案中で迷っているとのことであった。また、実施計画を持ってはいないと答えられた園にあっても、今後の入園者数によっては左右されることが考えられるというコメントをつけてくださっていた。

おわりに

日本における少子化は、家庭にあっては一人っ子が増え、兄弟姉妹とかがかわることもなく成長していく子どもたちが増えていることを示している。兄弟や姉妹とも喧嘩することもなく、自分の世界だけに生きている子どもたち。生存競争という言葉すら、この子たちにとっては死語となっ
てしまっているのである。幼児期における他者に対する思いやりの心は元来家庭における兄弟姉妹とのかかわりの中で培われてきたものであるが、家庭内でそれを経験することが難しくなった今、子どもたちが最初に同年齢相の者たちと出会う場所である幼稚園や保育所での活動が子どもたちに大きな影響を与えていくのである。

今回、久留米地区の幼稚園、保育所44園から異年齢児保育の活動についての回答をいただくことができたが、実際に久留米地区にある連盟への加盟、非加盟園を合わせた数からすればまだまだ少ないのも事実である。それでも多くの園が異年齢児集団による保育活動を実践しているということが垣間見れたことは意義あることであり、今後にも活かされていくものであると思っている。私自身、ここ数年来、異年齢児保育の活動についての研究を続けているが、さらに研究への意欲が湧いてきているところである。

新宿せいか保育園の園長である藤森平司先生は、もう一步踏み込んだ形としての「習熟度別保育」という異年齢児集団の活動を薦めておられるが、ここまで至るにはまだまだかなりの時間がかかるであろう。そしてまた、これまでの横割り保育の持つ良さをも考え合わせた異年齢児保育の活動が発展していくことがこれからの課題ともなるのではなかろうか。

[参考データ、書籍等]

福岡県私立幼稚園連盟HPアドレス <http://www.fysk.or.jp>

久留米市私立保育所連盟HPアドレス <http://www.kurume-shihoren.jp>

藤森平司「たてわりではない異年齢児保育 21世紀型保育のススメ」 世界文化社 2000年6月

(ながひさ きんや：幼児教育科 准教授)